

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
<b>[特別寄稿]</b>	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
<b>[対照研究]</b>	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
<b>[日本語研究]</b>	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
<b>[中国語研究]</b>	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”—	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語

## A Study of the Japanese “Word Combination” of Accusative Noun and Morphological Causative Verb

早津 恵美子  
HAYATSU Emiko

**要旨** 動詞を核にする連語というとき、その「動詞」は基本的には接辞のつかないものであり、『日本語文法・連語論 (資料編)』の論文でもそうである。ただし、ヲ格名詞と動詞のくみあわせについての奥田靖雄氏の 2 編では、「人に対するはたらきかけ」において、自動詞派生の使役動詞 (V-(サ)セル) を核とする連語が積極的にあげられている(「人を一よわせる (生理的な状態変化) / 歩かせる (空間的な位置変化) / いらいらさせる (心理的な状態変化) / とつがせる (社会的な状態変化)」。これらの連語タイプでは、かざられが V-(サ)セルであるものが多く、他動詞と使役動詞(「よわす: よわせる」)は「語彙=文法的にシノニムとして使用されている」とされる。

それでは、これら以外にも V-(サ)セルを核とする連語をみとめることはできるだろうか。本稿では、名詞と V-(サ)セルからなる、たとえば「衣装を目立たせる」「ルールをきしませる」「野菜を熱湯にくぐらせる」「ポケットからハンカチをのぞかせる」「娘に桐ダンスをもたせる」などを積極的に連語とみとめることを提案し、V-(サ)セルを要素とすることでこそ表せるむすびつきもあるのではないかということを考えてみた。このことはまた、V-(サ)セルのうちには、独自の語彙的・文法的な性質をそなえた単語として既成性の高いものがあることをみとめることにもつながる。

**キーワード:** 連語論 連語の体系 使役動詞 かざられ動詞 語彙的意味の一単位性

### 目次

1. はじめに
2. 『日本語文法・連語論 (資料編)』所収の論文における V-(サ)セル
3. 奥田論文にあげられている V-(サ)セルの性質
4. 名詞と V-(サ)セルからなる連語をみとめる意義と可能性
5. おわりに

1. はじめに<sup>1)</sup>

奥田 (1976) において言語の単位としてみとめられる「連語」のうち、名詞と動詞からなる連語 (名詞と動詞が [かざり-かざられ] の関係となる連語) における動詞はふつう接辞のつかないふつうの動詞である。『日本語文法・連語論 (資料編)』(1983) に所収の諸論文においても、連語の構成要素としての動詞はほとんどすべてそうである。

(1) 枝をきる 電柱にぶつかる 電車で通う 部屋からでる 駅まで歩く  
 ただし、所収諸論文のうち奥田靖雄氏の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(1968-1972)、「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」(1960)、「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」(1962) ではいくつかの連語タイプにおいて、かざられ動詞としてふつうの他動詞とともに V-(サ)セル (「使役のかたち」、本稿では「使役動詞」) があげられている (「親を驚かせる」「子供をすわらせる」など)<sup>2)</sup>。それらはどのような性質のものなのか、それら以外にも V-(サ)セルをかざられ動詞とする連語をみとめることができるのか、もしみとめるとしたらどのような連語があり、それらを連語とみとめることにどのような意義があるだろうか。名詞と動詞・形容詞からなる連語における名詞 (かざり名詞) については、ガ格名詞やゼロ格名詞をかざり名詞とみとめうるかどうか論じられている<sup>3)</sup> のに対して、動詞 (かざられ動詞) の形態論的な形についてはあまり論じられていないようである。本稿では、他動詞だけでなく V-(サ)セルを要素とする連語をみとめることが、連語のもつ意味的なむすびつきの体系性をよりきわだたせるのではないかということを考えてみる。

考察に先立ってまず、『日本語文法・連語論 (資料編)』(1983) にあげられている V-(サ)

<sup>1)</sup> 本稿は、2018年7月29日に大東文化会館ホールで行われた日中平和友好条約締結40周年記念学術講演会 (国際連語論学会主催) において、「名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語」として口頭発表した内容をもとにまとめたものである。発表の場やその後にさまざまな質問やアドバイスをくださった方々に感謝申しあげる。

<sup>2)</sup> 『日本語文法・連語論 (資料編)』(1983) 所収の諸論文のなかで、V-(サ)セル以外でかざられ動詞としてあがっているのは、受身動詞 (V-(ラ)レル) と一部のかさね動詞 (V-テV) である。V-(ラ)レルがかざられとなる連語は「カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ」(渡辺義雄) にみられ、相手的な結びつきの下位類としての《うけみ》類である。「車夫から言われる」「佐多から相談される」(p. 375) の2例のみで、カラ格名詞は動作の相手とされる。なお、語例として「(～カラ) 失われる」(p. 409 消滅) があげられ、二格と動詞とのくみあわせでも「あつけにとられる」(p. 304 かかわり)、「(～ニ) めぐまれる」(p. 309 道具)、「(～ニ) うまれる」(p. 310 結果規定) もある。

一方、「V-テV」としては、「V-テV (いく/くる/かえる/でる/もどる)」(教室にもっていく、早足にはいってくる、向こうへ歩いていく、火鉢の後ろから出てくる、遠くからきこえてくる)、「V-テV (やる/もらう)」(人にくれてやる、先生から忠告してもらう)、「V-テV (いる/ある/おく)」(朝から歩きまわっている、玄関から茶の間まで置いてある) 等があがっている。なお、このうち移動性のものについては、「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」(奥田) で、「かえっていく、あるっていく」等のかさね動詞について「方向性をもった移動動詞のグループに入ってくる」「(ゆくさきのむすびつき) をあらわす単語のくみあわせのなかにはいってくる」(p. 292) と明示的に説明されているが、他のは例にうかがえるだけである。

<sup>3)</sup> 鈴木康之 (1983)、根本今朝男 (1965)、仁田義雄 (1985)、松本泰丈 (2005[2006])、宮島達夫 (2005)、等。なお、奥田 (1963) のなかで、「雨がふる」を「うつくしい花」「つくえの足」「東北への旅」「パンを食べる」とともに (p. 299)、また「鼻がながい」を三上章の所説を検討するなかで (p. 301)、連語とされている。

セルがどのようなものかを確認しておく。

## 2. 『日本語文法・連語論 (資料編)』 所収の論文における V-(サ)セル

名詞と V-(サ)セルからなる連語タイプが示されているのは、ヲ格名詞と動詞とのくみあわせと、ニ格名詞と動詞とのくみあわせの、それぞれごく一部である。

### 2.1 ヲ格の名詞と動詞とのくみあわせ

ヲ格の名詞と動詞からなる連語は奥田 (1968-1972) で次のようにまとめられている<sup>4)</sup>。

第一章 対象へのはたらきかけ	
第一節 物にたいするはたらきかけ	「枝を 切る」
第二節 人にたいするはたらきかけ	「選手を 疲れさせる」
第三節 事にたいするはたらきかけ	「騒ぎを しずめる」
第二章 所有のむすびつき	「花を もらう」「野菜を 買う」「家をもつ」
第三章 心理的なかわり	
第一節 認識のむすびつき	「空を みる」「事情を 理解する」
第二節 通達のむすびつき	「学生に 集合時間を 伝える／知らせる」
第三節 態度のむすびつき	「親を 尊敬する」
第四節 モーダルな態度のむすびつき	「仕事を いいつける」
第五節 内容規定的なむすびつき	「寒さを 感じる」
第四章 状況的なむすびつき	「山道を いく」「橋を わたる」「夜道を 急ぐ」

このうち、かざられ動詞として V-(サ)セルがあげられているのは、「第一章 第二節 人にたいするはたらきかけ」のかなりの部分と、「第一章 第三節 事にたいするはたらきかけ」の一部分である。以下にそれぞれについて、かざられ動詞の語例を中心に紹介する。

(1) 「人にたいするはたらきかけ」を表す連語タイプは 5 つの下位類に分けられており、それぞれの連語をつくる動詞として次のような語があげられている。-(サ)セルのつかないふつうの他動詞とともに V-(サ)セルもある。長くなるが奥田 (1968-1972) にあげられている例をすべて下に示す。下線を付したものはいわゆる自他対応をなす他動詞である。

《生理的な状態変化》

{他動詞} ねかす、いかす

{V-(サ)セル: 自動詞派生の Vi-(サ)セル} あそばせる、あばれさせる、あるかせる、うならせる、おどろかせる、さわがせる、しなせる、すわらせる、たたせる、だまらせる、つかれさせる、とばせる、なかせる、ねかせる、ねむらせる、はらませる、はたらかせる、やすませる、よわせる、わかえらせる、わらわせる

《空間的な位置変化》

{他動詞} かえす、もどす、やる、よこす、おくる // つれる、つれだす、つれこむ、つれていく、つれてくる、つれてかえる、みちびく // だす、いれる、とおす、あげる // よびあつめる、よびいれる、よびだす、よびよせる、さそい入れる、さそいだす、まね

<sup>4)</sup> この章立ては奥田 (1960) の分け方とは異なっているが (早津 2017 参照)、本稿における問題としては両者のこの異同は問題にしないでよいと考える。

きいれる、まねきよせる、おいだす

{V-(サ)セル：自動詞派生の Vi-(サ)セル} あるかせる、あゆみよらせる、いかせる、おしかけさせる、かえらせる、かよわせる、すすませる、しりぞかせる、たたせる、たちのかせる、のぼらせる、はしらせる、ひかせる、むかわせる、はいらせる // 行進させる、前進させる、後退させる、移住させる、退却させる、避難させる

《心理的な状態変化》

{他動詞} おどろかす、おびやかす、かなします、くらます、ごまかす、じらす、だます、なやます、ばかす、まよわす、わずらわす (以上、末尾が-asuである動詞) // くるしめる、なごめる、あざむく、さいなむ、やりこめる、いいくるめる、くどきおとす、ときふせる、ちからづける // わびしくする、くるおしくする、くるしくする、いこじにする、みじめにする、しあわせにする、まじめにする、愉快にする、夢中にする、卑屈にする、大胆にする

{V-(サ)セル：自動詞派生の Vi-(サ)セル} あきさせる、いらだたせる、おこらせる、かなしませる、こまらせる、くるわせる、たのしませる、たかぶらせる、ひがませる、ひねくれさせる、まごつかせる、まどわせる、よろこばせる // うれしがらせる、うらやましがらせる、いやがらせる、おもしろがらせる、さびしがらせる、はかながらせる // いきいきさせる、いらいらさせる、ぎょっとさせる、せかせかさせる、どぎまぎさせる、ぞっとさせる、はっとさせる、びっくりさせる // 心配させる、心服させる、増長させる、安心させる、退屈させる、満足させる、混乱させる、失望させる、納得させる、興奮させる、反発させる、動揺させる、憤激させる

《社会的な状態変化》

{他動詞} やとう、めあわす、えんづける、くびきる // 雇用する、免職する、退校する、離縁する、起用する、抜擢する、勘当する、追放する、解放する、買収する // やる、よこす、もらう、とる、もつ // ひきずりこむ、たたきおとす、おく、おとしいれる // 軍人にする、亭主にする、よめにする、留守番にする、人質にする、犠牲にする

{V-(サ)セル：自動詞派生の Vi-(サ)セル} あわせる、あらそわせる、かたせる、たたかわせる、つとめさせる、したがわせる、そむかせる、ひきあわせる、まけさせる、めぐりあわせる、とつがせる // 入社させる、入学させる、退職させる、入閣させる、落第させる、家出させる、敗北させる、降参させる、出世させる、成功させる、失脚させる、奉仕させる

《よびかけ》

{他動詞} あおる、うながす、おしえる、おだてる、くどく、けしかける、せがむ、せきたてる、せびる、たのむ、といただす、そそのかす、よぶ、まねく、さそう // よびだす、

よびかえす、よびもどす、さそいだす、まねきよせる、まねきいれる

{V-(サ)セル} ナシ

これらの例にうかがえるように、よびかけ以外の4つの連語タイプでは、かざられ動詞としてV-(サ)セルが多くあげられている。そしてそれぞれの動詞の特徴として、「かざられ動詞は自動詞の使役のかたちであるという、一般的な結論が出せそうである」(生理的 p. 47)、「頻度をべつにすれば、……自動詞の使役のかたちがおおい」(空間的 p. 48)、「おおくが人間の心理的な状態をしめす自動詞の使役のかたちなのである」(心理的 pp. 50-51)、「自動詞の使役のかたちがおおい」(社会的 p. 54)のように、V-(サ)セルであることが積極的に述べられている(いずれも下線は早津)。したがって、対象へのはたらきかけの下位類として《人にたいするはたらきかけ》をみとめるとき、かざられ動詞としてV-(サ)セル(ここでは自動詞派生のVi-(サ)セル)は欠かせないものである。なお、《よびかけ》のむすびつきをつくるかざられ動詞としてV-(サ)セルがないのは、《よびかけ》が、人にある動作をするようにはたらきかけることを表しているものの、それに応じてその人が動作を行ったことまでは表していないので、V-(サ)セルの引き起こし性になじまないからだろう。

(2)「事にたいするはたらきかけ」を表す連語タイプは、《変化》のむすびつきと《出現》のむすびつきの2つに分けられており、そのうち「うごきや状態などにはたらきかけて、そこに変化をひきおこす」ことを表す《変化》のほうのかざられ動詞の一部として、ふつうの他動詞とともに自動詞派生のVi-(サ)セルがあげられている。他動詞は形態論的な特徴から、①接尾辞-eruで他動詞になっている動詞、②形容詞と「する」の合成、③語末が-asuである他動詞、の3種に分けてあげられ、その後「(③の)他動詞に形態論的に近いものとして、状態や運動における変化をしめしている自動詞の使役のかたちがあつて、これがやはり事にたいするはたらきかけをあらわす連語をこしらえている」(p. 66 下線は早津)としてVi-(サ)セルの例があげられている。そして最後に④「事にたいするはたらきかけをあらわす連語では、かざられになる動詞に漢語がおおくなってくる」(p. 66)として漢語動詞があげられている。なお、《出現》のむすびつきをつくる動詞はすべて他動詞である<sup>5)</sup>。

《変化》

{他動詞} ①たかめる、ふかめる、はやめる、よわめる、つよめる、ゆるめる、せばめる、かためる、おさめる、あらためる、まとめる、やすめる、とめる、ちぢめる、しずめる、いためる、ゆがめる、あらげる、やわらげる、さまたげる、ひろげる、ととのえる、かえる // ②ふかくする、せまくする、つよくする、かるくする、なごやかにする、ゆううつにする // ③みだす、ぼかす、おかす、ただす、けがす、こじらす、そらす、へら

<sup>5)</sup> 語例にうかがえるように、《変化》には自他対応をなす他動詞(下線を付したもの)が多いのに対して《出現》のほうには自他対応をなす他動詞はない。

す、ふやす、ます、うごかす // ④改革する、拡大する、排除する<sup>6)</sup>

{V-(サ)セル: 自動詞派生の Vi-(サ)セル} はずませる、しらませる、しずませる、いらだたせる、つまらせる、こじらせる、くさらせる // 発展させる、安定させる、混乱させる、減退させる、麻痺させる、増大させる、消滅させる、分裂させる、中止させる

《出現》

{他動詞} つくる、きたす、もたらす、かもす、かもしだす、もよおす、もうける、なす、かたちづくる // おこす、よびおこす、ひきおこす、まきおこす、うむ、うみだす、きづく // 形成する、構成する<sup>7)</sup>

{V-(サ)セル} ナシ

以上が、ヲ格の名詞と動詞とのくみあわせにおいてかざられ動詞としてあげられている他動詞および Vi-(サ)セルの例である。

## 2.2 二格の名詞と動詞とのくみあわせ

二格の名詞と動詞からなる連語は、奥田 (1962) で次のようにまとめられている。

### 第一章 対象的なむすびつき

第一節	ありかのむすびつき	「庭に (木が) ある」
第二節	ゆくさきのむすびつき	「自宅に 帰る」
第三節	くつつきのむすびつき	「ほおに 手を あてる」
第四節	ゆずり相手のむすびつき	「友達に 本を あげる」
第五節	はなし相手のむすびつき	「子供に はなしかける／知らせる」
第六節	かかわりのむすびつき	「病気に おびえる」
第七節	はたらきかけのむすびつき	「子供に 着物を かせさせる」
第八節	道具のむすびつき	「ひもに しぼる」

### 第二章 規定的なむすびつき

第一節	結果規定のむすびつき	「りっぱな教師に 成長する」
第二節	内容規定のむすびつき	「ぐちに きこえる」
第三節	様態規定のむすびつき	「熱心に 働く」
第四節	目的規定のむすびつき	「買物に 行く」

### 第三章 状況的なむすびつき

「玄関先に 働いている」「大雨に やってくる」「六時に 閉店する」「雨に ぬれる」

このうち、「第一章 第七節 はたらきかけのむすびつき」において、2例のみ V-(サ)セルを要素とする連語の例があげられている。第七節ではまず、「動作のはたらきかけをうけて、変化する対象は、を格の名詞でしめされるのがふつうであるが、あたえる、およぼす、かけるのような動詞がを格の名詞とくみあわさって、フレーズになり (たとえば、迷惑をかける、果をおよぼす、損害をあたえる)、そのフレーズがに格の名詞とくみあさわると、そのあいだにははたらきかけのむすびつきができる」(p. 307、太字は原文)と説明される(名詞とフレーズとのくみあわせの例はあげられていないが、「親に迷惑をかける」「会社に損害をあたえる」等だろう)。そして、「に格の名詞を支配して、はたらきかけのむすびつきをつくる能力

<sup>6)</sup> この3語のあとに漢語サ変動詞の例が38語あがっているが、ここでは省略する。

<sup>7)</sup> この2語のあとに漢語サ変動詞で例が13語あがっているが、ここでは省略する。

のある動詞は、ないだろう」としたうえで、「それにもかかわらず、このカテゴリーを対象的なむすびつきのなかにもうけるのは、動詞の使役のかたちがに格の名詞をともなって、そこにはたらきかけのむすびつきをこしらえているからである」(p. 308) として、「警官にてんやものをたべさせる<sup>8)</sup>」と「子どもに着物をかえさせる」という連語を含む使役文の実例があげられている(下線は早津)。ただし、他の連語タイプのようにかざられ動詞の例が列挙されているわけではない。

以上 2.1 節、2.2 節でみてきたことをふまえ、3 節以下では、次のことを考察する。

- ・奥田 (1968-1972) および奥田 (1962) にあげられている V-(サ)セルはどのような性質のものか、奥田はなぜこれらの V-(サ)セルを連語のかざられ動詞としてあげたのか。それぞれの V-(サ)セルの原動詞は、奥田 (1968-1972) では自動詞、奥田 (1962) では他動詞であるが、両者に共通点はあるのだろうか。(⇒3 節)
- ・V-(サ)セルには語彙的意味の一単位性・独自性をもつものがあり、そのような V-(サ)セルは連語のかざられ動詞としてみとめられるのではないか(⇒4 節)

なお、以下では、奥田 (1968-1972) を「ヲ格論文」、奥田 (1962) を「ニ格論文」とよぶことがある。

### 3. 奥田論文にあげられている V-(サ)セルの性質

奥田のヲ格論文、ニ格論文において V-(サ)セルを要素とするくみあわせは次のような類であった。2 節でも触れたが、これらの V-(サ)セルの原動詞は、(ア) と (イ) では自動詞、(ウ) では他動詞である。

- (ア) ヲ格の人名詞と Vi-(サ)セルとのくみあわせ (人にたいするはたらきかけ)
  - 《生理的な状態変化》選手を疲れさせる、子供を眠らせる、客を酔わせる、……
  - 《空間的な位置変化》子供を歩かせる、学生を帰らせる、兵を前進させる、……
  - 《心理的な状態変化》客をあきさせる、教師を怒らせる、親を悲しませる、……
  - 《社会的な状態変化》娘を嫁がせる、二人を争わせる、若手を入社させる、……
- (イ) ヲ格の事名詞と Vi-(サ)セルとのくみあわせ (事にたいするはたらきかけ)
  - 《変化》声をつまらせる、息をはずませる、労働者の生活を安定させる、……
- (ウ) ニ格の人名詞と Vt-(サ)セルとのくみあわせ
  - 《はたらきかけのむすびつき》物をたべさせる、着物をかえさせる (2 例のみ)

このうち (ア) は、人にはたらきかけてその人に何らかの変化を生じさせることを表している。物に対するはたらきかけの場合には変化の引き起こしを表す他動詞が多く存在しているのに対して、人に対するはたらきかけの場合は前節の例示にもうかがえるように他動詞が

<sup>8)</sup> 実例は、「たべさせる」ではなく「たべさす」であるが、奥田も「動詞の使役のかたち」としており、V-(サ)セルのバリエントと考える。

それほど多くなく（とくに生理的な状態変化）、人の動きや変化を表す自動詞からの Vi-(サ)セルがそれを補っている。名詞と Vi-(サ)セルのくみあわせをみとめることによって、人にはたらきかけてその変化を引き起こすことを表す連語タイプが豊かになっている。また、(イ)の《変化》のむすびつきにおいても、Vi-(サ)セルの原動詞は事の変化を表す自動詞であり、事名詞と Vi-(サ)セルのくみあわせは事にはたらきかけてその変化を引き起こすことを表す連語タイプを豊かにしている。

それでは、(ウ)類はどうだろう。「食べさせる」「(着物を)かえさせる」を含む2文があがっているだけであり、(ア)(イ)のようにV-(サ)セルが列挙されているわけではない。なぜこの2つだけが選ばれたのか、この2つに共通点はあるのか、この2つと(ア)(イ)との共通点はあるのか、あるとすればそれは何か、などについて奥田(1960、1968-1972)には説明がないのだが、この2つは何らかの意図をもって選ばれたものだろうか。本稿では、次に述べるように、「食べる」「(着物を)かえる」は他動詞ではあるが動作の主体の変化を生じさせる動きを表すものであり、そのことが関係しているのではないかと考える。

早津(2016:第3章)では、使役文の文法的な意味の考察に際して、意志動作を表す動詞を、その動作が何に変化を生じさせることを志向して行われるかという観点からまず4種5類に分け、それをさらに大きく2類にまとめる見方が示されている。4種5類は次のようなものである(動詞例は一部のみ引用)。

対象変化志向の他動詞： 事物に広い意味での変化を生じさせることを志向してそれにはたらきかけることを表す動詞。例；切る、削る、洗う、修理する、閉じる、片付ける // (杯に酒を) つぐ、塗る、つける、埋める、入れる // (箆笥から服を) 出す、はがす // 運ぶ、送る、おろす // (人を部屋に) 通す、集める、帰す // (火を) 弱める、改める、ゆるめる // (穴を) 掘る、作る、こしらえる、築く、建設する、建てる // おす、ひく、たたく、もむ、等

やりとり志向の他動詞： 人と人との間の物のやりとりや情報のやりとりを表す動詞。

授与・発信型： 動作の主体から相手に向けて物や情報を与える動きを表す動詞。例；支払う、払う、(金を) 出す、納める、届ける、貢ぐ、売る // 伝える、話す、連絡する、言う、しゃべる、(噂を) 流す、等

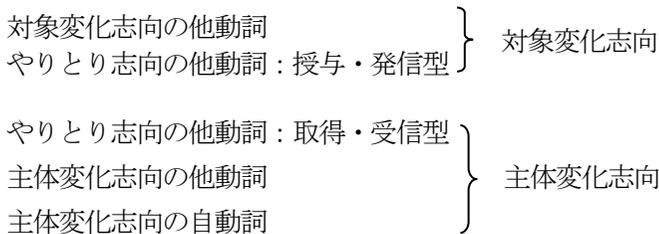
取得・受信型： 動作の主体が相手から物や情報を受けとる動きを表す動詞。例；うけとる、もらう、ひきとる、引き受ける、借りる、稼ぐ、買う // 聞く、聞きとる、等

主体変化志向の他動詞： 知覚、思考、理解、調査、習得、経験、などを表す動詞。対象を表すヲ格名詞とくみあわせりはするが、結果として対象が変化するわけではなく、動作によって主体が何かを感じたり認識したりあるいは知識や技能が身に

ついたりという主体側の変化が生じる動作である。また、摂食や着脱、姿勢変化といった主体の生理・身体面に変化が生じる動作を表す動詞もこの類である。例；見る、聞く、味わう // 考える、思いとどまる、決意する // 理解する、納得する、信じ込む // 調べる、調査する、探す // 習う、習得する、学ぶ、覚える // 経験する、体験する // 食べる、飲む、吸う // 着る、ぬぐ、(靴を) はく、かぶる、背負う、かつぐ、持つ // (腰を) かがめる、(目を) つぶる、等

主体変化志向の自動詞： 動作主体自身の位置や姿勢や社会的立場や状況等に新しい状態が生じることを表す動詞。例；行く、来る、帰る、去る、歩く、走る、泳ぐ // すわる、たつ、あおむく、うつむく、乗る、降りる // 結婚する、一人立ちする、独立する、勤める、入学する、卒業する、退会する // 働く、遊ぶ、等

そしてこのうちやりもらい志向の他動詞について、授与・発信型 (太郎が山田氏に {代金を支払う : 住所を伝える}) はやりもらいの相手 (間接対象) である「山田氏」の変化を引き起こすという点で対象変化志向であり、取得・受信型 (太郎が山田氏から {本をもらう : 住所を聞く}) は主体である「太郎」の変化を引き起こすという点で主体変化志向だとされる。このように捉えると上の4種5類は主体変化志向か対象変化志向かによって大きく2類に分けられるとされており、本稿でもそのように考える。



さて、意志動作を表す動詞についての早津 (同) のこの観点から先の (ア) ~ (ウ) 類についてそれぞれの原動詞をあらためてみる。(ア) 類の V-(サ)セルの原動詞のうち人の意志動作を表すもの (空間的な位置変化のむすびつきをつくる「歩く、帰る」等) は主体変化志向の自動詞である。また、(ア) 類のうち人の無意志動作を表す動詞 (疲れる、あきる) と、(イ) 類の動詞 (すべて無意志動詞) は、早津 (同) ではとりあげられていないが自動詞であって主体に変化が生じることを表すのでやはり主体変化志向である。では、他動詞派生の V-(サ)セルである (ウ) 類はどうか。

二格論文にあげられている「食べる」と「(着物を) かえる」はそれぞれ摂食動作と着脱動作を表しており、他動詞であるが主体変化志向の他動詞である。つまり、ヲ格論文・ニ格論文にあげられている V-(サ)セルはすべて主体変化志向の動詞からのものである。したがって、(ア) 類の「選手を疲れさせる」等と (イ) 類の「声をつまらせる」等、そして (ウ) 類

の「客においしい物を食べさせる」「子どもに着物をかえさせる」は、いずれも、ヲ格あるいは二格の人や事にはたらきかけてその変化を生じさせることを表す。こういったことから、ヲ格名詞と Vi-(サ)セルとのくみあわせはヲ格名詞と二項他動詞からなる連語（「人をなぐさめる」「声をあらげる」等）とみなすことができ、二格名詞とヲ格名詞と Vt-(サ)セルとのくみあわせは二格名詞とヲ格名詞と三項他動詞からなる連語（「子供にお菓子を与える」「娘に振袖を着せる」等）とみなすことができるのではないか。それに対して、他動詞のうち対象変化志向の他動詞からの Vt-(サ)セルの場合、たとえば「後輩に荷物を運ばせる」「子供に食器を洗わせる」は二格名詞である「後輩」「子供」の変化を生じさせることを表しているわけではない。したがって、これらは、二格名詞とヲ格名詞と三項動詞からなる連語タイプのいずれかに準ずるものとみなすことができないのではないか。

奥田は、「人に物を食べさせる」「人に服をかえさせる」を《はたらきかけ》のむすびつけを表す連語とするにあたって、2.2 節にも引用したように「このカテゴリーを対象的なむすびつけのなかにもうけるのは、動詞の使役のかたちがに格の名詞をともなって、そこにはたらきかけのむすびつけをこしらえているからである」（p. 308 下線は早津）としているが、あげられている2例が主体変化志向の他動詞であることは上のような意義をもつことだったのではないか。つまり、奥田としても二格名詞と Vt-(サ)セルのくみあわせのすべてを《はたらきかけ》の連語とみなそうとしたのではなく、主体変化志向の他動詞からの Vt-(サ)セルに限ってということだったのではないだろうか。

このように考えると、「食べる」「(着物を)かえる」以外の主体変化志向の他動詞<sup>9)</sup>からの Vt-(サ)セルを要素とするくみあわせ（「子供に帽子をかぶらせる」「生徒に公式を覚えさせる」「部下にやる気を起こさせる」「係員にお礼の品を受けとらせる」「客により演奏をきかせる」）も連語とみなすことができるのではないか。また、物にたいするはたらきかけを表す連語として奥田は Vi-(サ)セルを要素とする連語をあげていないが、ヲ格の名詞と自動詞派生の Vi-(サ)セルからなるくみあわせにも連語とみとめうるものがあって（たとえば「風船をふくらませる」）、そうすることによって連語の表す意味的なむすびつけの体系を豊かにしているのではないか。次節ではその可能性を考えてみる。

#### 4. 名詞と V-(サ)セルからなる連語をみとめる意義と可能性

前節までの考察をふまえ、この節では、名詞と V-(サ)セルのくみあわせのうち連語とみとめうるものにどのようなものがあるのか、それらが名詞と他動詞からなる連語の体系の中でどのような位置をしめるのかについて考える。V-(サ)セルをかざられとする連語は、ふつうの他動詞ではなく V-(サ)セルがかざられ動詞であるからこそその独自性が発揮された連語と

<sup>9)</sup> 取得・受信型のやりもらい志向の動詞からの Vt-(サ)セルも含む。

なっているのだと思われる。4.2節でそういった連語の例を具体的にあげるのに先立ち、4.1節ではV-(サ)セルの語彙的意味の単位としての性質について早津(2016:第12章)で述べたことを紹介しつつ考えておく。

#### 4.1 語彙的意味の独自性をもつV-(サ)セル

V-(サ)セルという形は原動詞(V)と-(サ)セルからなる形式であるのだが、それにもかかわらず、原動詞(V)の表す語彙的意味と-(サ)セルの表す文法的意味(引き起こし)とのくみあわせというのではなく、一単位としての独自の語彙的意味をもつことがある<sup>10)</sup>。それを考えるにあたっていくつかの点を確認しておく。

##### (ア) 原動詞による表現の有無

V-(サ)セルの中には、対応する原動詞(V)が現代語で使われていないものがあり、それらは原動詞の語彙的意味を問うことはできず、V-(サ)セルに独自の語彙的意味がある。

##### (2) パイプをくゆらせる [\*くゆる]、相手に本心をけどらせる [\*けどる]

また、対応する原動詞(V)が現代語にあるものの当該のV-(サ)セル表現に対応するものとしては原動詞による表現が不自然な場合があり、このようなV-(サ)セルも、原動詞との関係をはなれたV-(サ)セルとしての独自の語彙的意味をもっている。

##### (3) {行方を/姿を} くらませる [? {行方を/姿が} くらむ]、視線を走らせる [?視線が走る]、病院までタクシーを走らせる [?病院までタクシーが走る]、嫁ぐ娘に桐箆箆をもたせる [?嫁ぐ娘が桐箆箆をもつ]、相手に札束をちらつかせる [?相手に札束がちらつく]、業者に金を握らせる/つかませる [?業者が金を握る/つかむ]、友達と文学論を戦わせる [?文学論が戦う]、容疑者を泳がせる [?容疑者が泳ぐ]、野菜を熱湯にくぐらせる [?野菜が熱湯にくぐる]

##### (イ) ふつうの他動詞の語彙的意味との関係

V-(サ)セルが独自の語彙的意味をもち、類義の他動詞(-(サ)セルによる派生でないふつうの他動詞)と意味的な張り合いをなしているものがある。たとえば次の「忍ばせる」は「入れる」「隠しもつ」と類義といえるが、やはりそれらとは異なる独自の語彙的意味をもつものとして「入れる」「隠しもつ」では表現できない意味やニュアンスを表している。

##### (4) 「(～ニ～ヲ) 忍ばせる<sup>11)</sup>」 [vs. 入れる、隠しもつ]

「容疑者はバッグに六本組みのドライバーセットを忍ばせ、搭乗ゲートの手荷物検査をクリア」「三好さんは幼い長女の写真を常に胸にしのばせている」「におい袋をバツ

<sup>10)</sup> 同様のことは、V-(サ)セルだけでなく、V-(ラ)レル(才能に恵まれる)、V-ナイ(つまらない映画)、V-ズ(思わず声をあげた)、V-ヌ(あらぬ疑い)、V-タ(うがった見方)、N-ト(やまと積む)N-カラ(頭から否定する)などにもみられる。早津(2001)で考察した。

<sup>11)</sup> この「忍ばせる」は国立国語研究所(宮島達夫)(1972:685)でも「形の上からは使役的なのに、もとの動詞との対応関係が一般の規則的なものからずれていて、独立の他動詞となっている」とされている。

グにしのばせておく」

上の(2)(3)のV-(サ)セルを含め、次のようなV-(サ)セルも、類義の他動詞と語彙的意味の張り合い関係を保って存在している。

- (5) パイプをくゆらせる [vs. ふかす]、相手に本心をけどらせる [vs. ほのめかす]、{行方/姿を} くらませる [vs. 消す/わからなくする]、視線を走らせる [vs. やる]、病院までタクシーを走らせる [vs. 運転する]、相手に札束をちらつかせる [vs. みせる]、業者に金を握らせる/つかませる [vs. 与える/やる/わたす]、友達と文学論を戦わせる [vs. かわす]、野菜を熱湯にくぐらせる [vs. 通す]、ポケットからハンカチをのぞかせている [vs. 出している]、本棚にさっと視線を走らせる [vs. 動かす]

さらには、そのV-(サ)セルに相当する語彙的意味を表すふつうの他動詞がなさそうなものもある。次のV-(サ)セルは、-(サ)セルのつかないふつうの他動詞で同じ事態を表現しようとしても適切な他動詞がみいだしにくい。

- (6) 風船をふくらませる、甘柿を自然に色づかせる、衣装を目立たせる

このように、V-(サ)セルの中には、意味的な透明性のある程度残した独自の語彙的意味をもつ一単位の動詞といえるものがあり<sup>12)</sup>、それらは、ふつうの他動詞の表す語彙的意味の体系を補う独自の語彙的な意味をもつものとしてレキシコンのなかに存在しているのだと思われる。国語辞書に立項されるV-(サ)セルがあることもそれをうかがわせる（「知らせる、聞かせる、もたせる、合わせる」はほとんどの国語辞書に、「泳がせる、走らせる、光らせる、しのばせる」もかなりの辞書に立項されている）。そのようなV-(サ)セルと名詞とのくみあわせである「NヲVi-(サ)セル」や「NニNヲVt-(サ)セル」は連語とみとめることができ、そうすることの意義があると思われる。次節では、そのような連語の可能性を具体的な例をあげつつ考えていく。

#### 4.2 名詞とV-(サ)セルからなる連語の種々

ふつうの他動詞だけでなくV-(サ)セルも連語のかざられとみとめる可能性については、早津・高(2012)において、実例(紙の書籍および電子化された公開のコーパス資料)の調査結果を示すとともにわずかだが考察した。以下にあげる連語の例は、早津・高(同)であげたものを参考にしている。奥田(1960、1968-1972)においてV-(サ)セルの例があがっていない連語タイプであってもV-(サ)セルをかざられとする連語をみとめることでその連語タイプを豊かにすることができると考える。奥田氏もかざられ動詞としてのV-(サ)セルを積極的

<sup>12)</sup> 独自の語彙的意味を獲得したV-(サ)セルの中には、原動詞の元の意味からのV-(サ)セルとは異なる文法的な性質をもつようになっているものがある。たとえば、「(容疑者を)泳がせる」は、『日本国語大辞典』に立項されていて語釈として「拘束せずにひそかに監視しながら、表面的には自由に行動させる。犯罪捜査の情報を得るなどの場合にいう。」とされている。この意味の「泳がせる」は、「生徒を{30メートル: ゆっくり: プールで}泳がせる」のような距離や様態や場所を表す副詞的な修飾語をとることができない。

に否定・排除したのではなく、ある連語タイプのかざられ動詞としてふつうの他動詞が豊かにあるときにはV-(サ)セルの例をあげなかったということかもしれない。以下では、物にたいするはたらきかけ、人にたいするはたらきかけ、事にたいするはたらきかけに分けて考えていく。

#### 4.2.1 物にたいするはたらきかけを表す連語

奥田 (1978-1972) における物にたいするはたらきかけの下位類のひとつである《もようがえ》についてまず考えてみる。奥田 (同) では《もようがえ》の特徴である「具体的な動作が物にはたらきかけて、そのあり方になんらかの変化をひきおこす」というときの「変化」として、「表面上の変化」「内部の変化」「運動の状態にひきこむという変化」「すがたをけしってしまうという変化」等があるとされている。奥田 (同) に列挙されている動詞のうち「運動の状態にひきこむという変化」を表す他動詞にあたるのは「そよがす、ゆさぶる、ゆする、ゆらす、ころがす、振り回す、揺り動かす<sup>13)</sup>」等だろうが、次のようなVi-(サ)セルもこのむすびつきを表せそうである。

《もようがえ (運動の状態にひきこむという変化)》

(旗を) なびかせる、(影をスクリーンに) 踊らせる/舞わせる、(炎を) おののかせる、  
(レールを) きしませる、そよめかす、震わせる、ゆらめかせる、ゆるがせる、わなな  
かせる、うならせる、ざわめかせる // (水面を) 波うたせる、はためかせる、ひらつ  
かせる // (軸を) 回転させる、鼓動させる、震動させる // 一回りさせる // ばたば  
たさせる、ひらひらさせる、ふらふらさせる、ぶらぶらさせる

また、奥田 (同) には、「植木を枯らす、雑草をはやす、卵をかえす」のような連語はあげられていないが、これらは植物や生物の内発的变化(上の奥田の「内部の変化」)の助長を表すものとして《もようがえ》の下位をなすといえそうである。そして、このむすびつきは他動詞よりもむしろVi-(サ)セルを要素とする連語によって豊かに表現される。

《もようがえ (植物や生物などの内発的变化の助長)》

(柿を) 熟ませる、熟れさせる、枯れさせる、腐らせる、茂らせる、熟させる、萎え  
させる、(つるを) 這わせる、ひからびさせる、(幹を) 太らせる、実らせる // (甘柿  
を) 色づかせる、芽吹かせる // 開花させる、生育させる、醗酵させる、繁茂させる、  
孵化させる、腐敗させる、密生させる

また、「看板を目だつようにする」といった「～ようにする」は、物というより物の見え方の変化として「目だたせ」とでもいえそうなむすびつきである。これを表すふつうの他動詞はなさそうなものに対して、Vi-(サ)セルにはいくつか見いだせる。

《もようがえ (目だたせ)》

<sup>13)</sup> これらの動詞も、2.1節でみた《変化》の動詞類の③と同じく語末が「-asu」である。

(看板を) 目立たせる、(衣装を) 引き立たせる、(輪郭を) くっきりさせる/際立たせる  
/映えさせる [vs. {目立つ/引き立つ/際立つ/映える} ようにする]

上にみてきたもの以外で《もようがえ》のむすびつきをなす Vi-(サ)セルとして次のようなものがあり、それぞれ、ふつうの他動詞とは異なる独自のむすびつきを表しうる。

《もようがえ (その他)》

(風船を) ふくらませる、(竹を) たわませる、(牛乳を) 沸騰させる、(果汁を) 固まらせる [vs.固める]、(パイプを) くゆらせる [vs.ふかす]、(足音を) 忍ばせる [vs.小さくする/ひそめる]、(行方を) くらませる [vs.わからなくする]

奥田 (同) における物にたいするはたらきかけは、上でみた《もようがえ》を含めて 6 種あるが、《ふれあい》以外のむすびつきには、それを作れそうな Vi-(サ)セルがある。

《とりつけ》

(蔓を竹に) 絡ませる、(綿に消毒液を) しみこませる、(コットンに化粧水を) 含ませる、(磁石に針を) 吸いつかせる、(野菜を熱湯に) くぐらせる [vs.通す]、(バッグに刃物を) 忍ばせる [vs.入れる/隠しもつ]、(財布に写真を) ひそませる [vs.入れる]、(バッグに本を) すべりこませる [vs.入れる]、(布に汗を) 吸い取らせる、(板にフィルムを) 付着させる、(マントを風に) なびかせる

《とりはずし》

(風呂桶から水を) あふれさせる、(布の汚れを) 浮き上がらせる、(汚れを肌から) 浮き上がらせる

《うつしかえ》

(車を家から病院まで) 走らせる [vs.運転する]、(器具を水中に) 沈ませる、(ミカンを手前へ) ころがらせる、(ふたを逆方向に) スライドさせる

《結果的》

(花を) 咲かせる、(実を) ならせる、(城を) 完成させる、(蛆を) わかせる、(トンネルを) 開通させる、(周りに堀を) めぐらせる

《ふれあい》の連語は「ドアをたたく、壁を蹴る、頬をなでる」等だが、ふれあいのむすびつきは Vi-(サ)セルでは表現しにくいようである。これらがいずれも対象の変化を引き起こすはたらきかけを表すのではないからだろう。また、「はさみを使う、器具を用いる、機械を利用する」のような《使用》のむすびつきともいえそうな連語もヲ格論文にあげられていないが、このむすびつきも Vi-(サ)セルでは表せそうにない。《使用》も対象の変化を含意していないからだろう。

#### 4.2.2 人にたいするはたらきかけを表す連語

先に 2.1 節でみたように、奥田のヲ格論文では、人にたいするはたらきかけの下位の 5 つ

の類のうちよびかけ以外の4つの類に自動詞派生のVi-(サ)セルが多くあげられている。これらにさらに多様なVi-(サ)セルを加えることはできそうにないが、いくつかはみいだせる。また、2.2節および3節でみたように、奥田の二格論文において「食べる」「(服を)かえる」という主体変化志向の他動詞からのVt-(サ)セルがはたらきかけのむすびつきをなすものとしてあげられていた。ここではこれらを含め主体変化志向の他動詞からのVt-(サ)セルが要素となる連語タイプも考えてみる。このように考えていくので、以下のV-(サ)セルには、自動詞派生のVi-(サ)セルも他動詞派生のVt-(サ)セルも含まれる。

(1) 生理的な状態変化を表すものとしてヲ格論文にあげられているVi-(サ)セルは和語動詞だけであるので(他の3つの類には漢語動詞もあがっている)、漢語サ変動詞の例が追加できる。そして、摂食や着脱を表す他動詞からのVt-(サ)セルをかざられとする連語も、主体の生理的な状態変化の引き起こしを表す。

《生理的な状態変化》

- ・起立させる、着席させる、沈黙させる、爆笑させる、妊娠させる、泥酔させる、休憩させる、衰弱させる
- ・(子供に栄養のある物を)食べさせる [vs. 与える]、(客においしい酒を)飲ませる [vs. 提供する]、(こどもに薬を)のみ込ませる、(きれいな空気を)吸わせる
- ・(娘に振袖を)着させる [vs. 着せる]、(園児に帽子を)かぶらせる、(子供に長靴を)はかせる、(けが人にタオルを)はおらせる [vs. かける]、(子供にランドセルを)背負わせる

(2) 心理的な状態変化を表すものにも他動詞派生のVt-(サ)セルによるくみあわせをみとめることができる。人に生じる感情をかざり名詞として表現できるのが特徴である。

《心的な状態変化(感情おこし)》

(生徒にやる気を)起こさせる、(息子に苦しみを)味わわせる、(係員に不審を)いだかせる、(社員に誇りを)感じさせる、(子供に悲しみを)覚えさせる // (選手に厳しさを)思い知らせる、思い出させる、気づかせる // 意識させる

先述のように、奥田(1968-1972)は「人に迷惑をかける」「人に満足を与える」などを名詞とフレーズからなるくみあわせとしている。ここで《心的な状態変化(感情おこし)》とした類はそれに似ていて、「N(感情/感覚)ヲVt-(サ)セル」がフレーズとなってそれが二格名詞とくみあわさっている<sup>14)</sup>。

(3) 社会的な状態変化のむすびつきの語例を補うものとして、単純な他動詞では表現できない独自の語彙的意味や、他動詞と張り合い関係をなす語彙的意味を獲得しているVi-(サ)セルを追加することができる。

<sup>14)</sup> こういったVt-(サ)セルは村木(1991)等のいう機能動詞にあたるといえる。

《社会的な状態変化》

- ・(容疑者を)泳がせる、(世間を)さわがせる、(子供を新しい環境に)慣れさせる
- ・(山田氏を議長に)つかせる [vs. 起用する/抜擢する/任命する]、(新卒者を運転手として)働かせる [vs. 雇用する/雇う/召し抱える]

(4) 奥田 (1968-1972) には連語タイプとしてたてられていないが、他動詞派生の Vt-(サ)セルをかざられとするくみあわせには、人にはたらきかけてその認識など知的な状態を変化させることを表すものもある。

《知的な状態変化》

- (生徒に公式を)覚えさせる、(社員に社史を)学ばせる [vs. 教える<sup>15)</sup>]、(子供にピアノを)習わせる、(学生に概論書を)読ませる、(園児たちによい音楽を)聞かせる、(新人に要領を)のみこませる、(学生たちに曲のテーマを)理解させる、(家族に事情を)納得させる

(5) ヲ格論文で《通達のむすびつき》、ニ格論文で《はなし相手のむすびつき》とされているものを、三単語のくみあわせからなる連語として積極的にみとめることにする。名称は仮に《情報発信のむすびつき》とする。Vt-(サ)セルには受信型のやりもらい動詞からのものもある。

《情報発信のむすびつき》

- (孫に昔話を)聞かせる<sup>16)</sup> [vs. 語る/話す]、(社員に情報を){知らせる/熟知させる} [vs. 伝える/説明する]、全員に方針をゆきわたらせる、相手に本心をけどらせる [vs. ほのめかす]、相手にもうけ話をちらつかせる [vs. 伝える/話す]

(6) ヲ格論文で《所有のむすびつき》の一部分とされ、ニ格論文で《ゆずり相手のむすびつき》とされている、事物を他者に与えることを表すものをここでは《事物授与のむすびつき》を表す連語とする。Vt-(サ)セルは取得型のやりもらい動詞からのものもある。

《事物授与のむすびつき》

- (警官に金を){握らせる/つかませる} [vs. やる/渡す/おくる/与える]、(嫁ぐ娘に桐箆箆をもたせる [vs. やる/わたす/おくる/与える]、(部下に褒美を)とらせる、(相手にお礼を)うけとらせる

#### 4.2.3 事にたいするはたらきかけを表す連語

奥田 (1968-1972) には、《変化》のほうに自動詞からの Vi-(サ)セルがあげられている。この類に加えるものとして次のような Vi-(サ)セルがある。

<sup>15)</sup> 「子供に英語を教える」はニ格論文において通達のむすびつきを表す連語とされているが、ニ格の人への単なる情報発信ではなく、知的な状態変化の引きおこしとみなせるのではないか。

<sup>16)</sup> 奥田のニ格論文 p. 300 に《はなし相手のむすびつき》をつくる動詞として「きかす」がある。

《変化》

(活力を/徳目を) 衰えさせる、(病を) こうじさせる、(商店街を) さびれさせる、(気持ち) しずませる、(雰囲気) 白ませる、(その場を) なごませる、(権威主義) 滅びさせる

奥田 (同) では、《出現》にはVi-(サ)セルの例があげられていないが、ある現象を生じさせることはむしろ次のようなVi-(サ)セルによって豊かに表現されるのではないか。

《出現 (現象おこし)》

(混乱を) 生じさせる、(困難を) 浮き立たせる、(波を) 打たせる、(地響きを/匂いを) させる、(香気) 立たせる、(不穏な雰囲気) 漂わせる、(爆音) 轟かせる、響かせる、(雨) 降らせる // 鳴り響かせる、響きわたらせる、湧き立たせる、輝きださせる // 共鳴させる、反響させる、発散させる、爆発させる

ところで、奥田 (同) において、事にたいするはたらきかけの下位類としては《変化》と《出現》のみである。物にたいするはたらきかけにおける下位の6類との関係を見ると、連語の構造の特徴から、《変化》は《もようがえ》に相当し、《出現》は《結果的》に相当すると思われる。Vi-(サ)セルもかざられ動詞とみとめるとすれば、構造の面で《とりつけ》《とりはずし》《うつつかえ》に相当する次のような連語タイプがみとめられそうである。

《付与・転移 (とりつけ)》 [事ニ 事ヲ V-(サ)セル]

(横顔に哀感を) 漂わせる [vs. 浮かべる]、(生活に潤いを) もたせる、(目元に悲しみを) にじませる、(横顔に不安を) のぞかせる、(悲しみを行間に) 漂わせる、(瞳に感謝の気持ち) あふれさせる、(メッセージに暗号) 含ませる [vs. こめる]、浮かばせる、(二国間にぎこちなさを) ひそませる、(制度を日本に) なじませる、(世間に名声) とどろかせる // (判断に私情) 介入させる [vs. まじえる]、浮かび上がらせる、滲みださせる、際立たせる // 結晶させる、発現させる

《分離 (とりはずし)》 [事カラ 事ヲ V-(サ)セル]

(文学科を文理学部から) 独立させる、(日本社会を旧弊から) 脱却させる、脱皮させる  
《移行 (うつつかえ)》 [事ヲ 範囲ニ V-(サ)セル]

(思想を世の中に) ゆきわたらせる、(教ををすみずみに) 伝播させる

上のそれぞれの類をつくるふつうの他動詞としては、《付与・転移》は「こめる、あたえる // 織りこむ、盛りこむ、組み入れる、組みこむ // 加味する、付与する、付加する」、《分離》は「のぞく // 差し引く、とりのぞく、ぬぐいさる // 一掃する、撤収する、排除する、払拭する」、《移行》は「ひろめる、伝える」といったものが相当するだろう。

5. おわりに

以上、本稿では、名詞 (ヲ格名詞とニ格名詞) と動詞からなる連語のかざられ動詞として、

ふつうの他動詞だけでなく使役接辞-(サ)セルによって派生された V-(サ)セルをも積極的にみとめることの可能性と意義を考えてきた。V-(サ)セルを連語の要素とすることによって連語の体系がより豊かなものになることを示そうとした。

奥田のヲ格論文では、当該の連語タイプの語例をあげる際に、まず和語動詞があげられ、次に必要に応じて漢語サ変動詞があげられる。そして和語動詞においては、単純動詞がまずあげられ、必要ならば「まきつける」のような複合動詞、「うれしがらせる」のような派生動詞、「かるくする」のような「する」とのくみあわせ動詞があげられる<sup>17)</sup>。ヲ格論文の「第一章 対象へのはたらきかけ」の「第一節 物にたいするはたらきかけ」の語例はすべて和語の他動詞である<sup>18)</sup>。このことは、奥田 (1968-72[1983:66]) に「物にたいするはたらきかけをあらわす連語の領域では、固有日本語の動詞が大部分をしめていて、漢語動詞のはいりこむすきまがない。」とあることから意識的だったことがうかがえる。たしかに語例は和語動詞であるが、「(タオルを) 洗濯する」「(会場に消火器を) 設置する」「(溶液から不純物を) 除去する」「(荷物を) 運搬する」「(全身を) 殴打する」「(ダムを) 建設する」などを、文体的にかたいとはいえ、奥田としても物にたいするはたらきかけをあらわす連語とみなさいわけではないだろう。また、事に対するはたらきかけでは多くの漢語動詞が積極的にあげられ、「事にたいするはたらきかけをあらわす連語では、かざられになる動詞に漢語がおおくなってくる。このことはかざられ動詞の語彙的な意味の抽象性にかかわっている。固有日本語の動詞の抽象化の過程、固有日本語による抽象的な動詞の生産が、これにたいする要求からたちおくれいて、漢語動詞がはいりこんできたのだろう。」と、日本語の語彙体系のなかでの漢語動詞の必要性が述べられている (奥田 1968-72[1983:66])。V-(サ)セルについても、人に対するはたらきかけでは Vi-(サ)セルがふつうの他動詞とともに積極的にとりあげられている (漢語動詞からの Vi-(サ)セルも含まれる)。こういったことから考えると、名詞と動詞からなる種々の連語タイプにおいても、ふつうの他動詞だけでなく V-(サ)セルを認めることが奥田氏の連語論のなかで許されないわけではないように思われる。

なお、連語の重要な性質として、たとえば松本 (2003[2006:150]) に「単語と連語は、ともに現実の断片に対するなづけの単位として、文の材料となる点が共通である。」とあるように、「なづけの単位」であるという性質がある。本稿ではこのことについてしっかり考えることができなかったが、3節で述べたことは、主体変化志向の自動詞・他動詞からの Vi-(サ)セル・Vt-(サ)セルは名詞とくみあわさってなづけの単位となりうるのに対して (「人を歩かせる」「人に御飯をたべさせる)、対象変化志向の他動詞からの Vt-(サ)セルにはそのような

<sup>17)</sup> 二格論文でも全体としてはこの方針だと思われるが、二格において重要な連語類だと思われる《存在》には、「存在する、滞在する」のような漢語動詞、「ほうっておく」のような和語のくみたて動詞があげられている。

<sup>18)</sup> そして、下位の6類のうち《もようがえ》のむすびつきの語例はすべて単純動詞である。

性質がないのではないか(「人にケーキを切らせる」「人に荷物を運ばせる」)ということであった。ただし十分な考察はできなかつたので、上のこととともに今後さらに考察を続けたい。

## 参考文献

- 奥田靖雄 (1960) 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」 言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 pp. 151-279、むぎ書房 (「編集にあたって」によると、1960年の研究会でのガリ版刷原稿が未公開だったものを収録したもの)。
- 奥田靖雄 (1962) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」 言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 pp. 281-323、むぎ書房 (「編集にあたって」によると、1962年の研究会でのガリ版刷原稿が未公開だったものを収録したもの)。
- 奥田靖雄 (1963) 『「文法教育の革新」について』 『言語生活』 146 (奥田靖雄 1985 『ことばの研究・序説』 pp. 295-302、に再録)。
- 奥田靖雄 (1968-1972) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」 『教育国語』 12、13、15、20、21、23、25、26、28、むぎ書房 (言語学研究会 (編) 1983 『日本語文法・連語論 (資料編)』 pp. 21-149、に再録)。
- 奥田靖雄 (1976) 「言語の単位としての連語」 『教育国語』 45、むぎ書房 (松本泰丈編 1978 『日本語研究の方法』 pp. 259-274、奥田靖雄 1985 『ことばの研究・序説』 pp. 67-84、に再録)。
- 言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房。
- 国立国語研究所 (宮島達夫) (1972) 「第3部の1. 動詞の意味と文法的性質」 『動詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告 43)、pp. 665-708、秀英出版。
- 鈴木康之 (1983) 「連語とはなにか」 『教育国語』 73、pp. 30-43、むぎ書房。
- 仁田義雄 (1985) 「言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』を読んで」 『国語学』 140、pp. 44-50、国語学会。
- 根本今朝男 (1965) 「「が」格の名詞と形容詞とのくみあわせ」 国立国語研究所 『ことばの研究 第2集』 pp. 63-74、秀英出版。
- 早津恵美子 (2001) 「日本語における語彙的な意味の単位をめぐって」 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』 7、pp. 219-254 (文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A) 『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』 研究成果報告書)。
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』 ひつじ書房 (とくに、第3章 意志動作の引きおこしを表す使役文の文法的な意味、第10章 「もたせる」における使役動詞性と他動詞性、第11章 「知らせる」「きかせる」における使役動詞性と他動詞性、第12章 「V-(サ)セル」の語彙的意味の一単位性)。
- 早津恵美子 (2017) 「ヲ格名詞と動詞からなる連語についての奥田靖雄氏の2つの論文について」 国際連語論学会編 『鈴木泰先生古稀記念論文集』 pp. 124-140、日本語文法研究会。

- 早津恵美子・高京美 (2012) 『コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態』(コーパスに基づく言語学教育研究資料6)、東京外国語大学大学院総合国際学研究院地域文化研究科グローバルCOE プログラム コーパスに基づく言語学教育研究拠点.
- 彭広陸 (2004) 「連語論研究の再出発」 記念行事委員会編『21 世紀言語研究-鈴木康之教授古希記念論集』 白帝社.
- 松本泰丈 (2006) 『連語論と統語論』 至文堂 (とくに、1979 「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ—連語の記述とその周辺」、1985 「連語論の考えかた」、1985 「連語の記述をめぐって—奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」にまなぶ—」、1995 「単語・連語・慣用句」、2003 「なづけの単位としての連語」、2000 「「連語」概念の発達」、2005 「連語のくみだてにくわわる名詞—名詞のハダカ格・ガ格のあつかいをめぐって」).
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』 むぎ書房.
- 宮島達夫 (2005) 「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』70-1、pp. 6-33、至文堂.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房.